内藤時代 1747～1871年

〈城主〉内藤政樹(1747～1756) 内藤政陽(1756～1770) 内藤政脩(1770～1790) 内藤政韶(1790～1802)
内藤政和(1802～1806) 内藤政順(1806～1834) 内藤政義(1834～1862) 内藤政挙(1862～1871廃藩置県)
〈石高〉7万石(譜代大名)
〈家紋〉下り藤紋 黄羅紗地下がり藤紋大名火消装束(延岡市教育委員会所蔵)より加工

延享4年(1747)、陸奥国磐城平(福島県いわき市)より内藤政樹が7万石で入封し、以降、内藤氏が明治4年(1871)に廃藩置県をむかえるまで、8代・125年にわたって延岡藩を治めました。この内藤氏の入封は、「三方領地替え」によるもので、前藩主の牧野氏が笠間藩へ、笠間藩を治めた井上氏が磐城平藩へ配置換えとなっています。

内藤氏の拝領石高は、磐城平藩・延岡藩とも7万石ではあるものの、延岡藩領は分散しており、実高で2万石の減少がみられ、延岡入封当時から厳しい財政問題を抱えました。こうした財政問題に対して、有扶持制や倹約令、専売制など様々な藩政改革が行われました。

財政が厳しい中、歴代藩主は学問を好み、政樹は久留島義太(喜内)・松永良弼といった数学者など多くの人材を登用し、政陽は本小路に「学寮・武寮」を、政順は江戸藩邸に学問所「崇徳館」を、政義は学寮をさらに充実させた「広業館」と医学所「明道館」を設立するなど、文武両面に渡り人材育成に力を注ぎました。

延岡城下家中屋敷付絵図(部分)【明治大学博物館所蔵】

最後の藩主政挙は、元治元年(1864)、慶応2年(1866)に第1次、2次長州征伐へ、慶応4年には鳥羽・伏見の戦に出兵し、徳川の命により京都郊外の野田口の守備にあたります。明治2年(1869)に版籍奉還によって延岡藩知事となります。明治5年、廃城令が発令されますが、延岡城では明治4年6月に「藩城ヲ廃シ薬園トナス」という記録が残っています。

政挙は教育普及事業に尽力し、明治6年に延岡社学(現岡富中学校付近)を設立(明治8年亮天社と改称)します。また、明治9年に亮天社附属として女児校舎を建設(明治34年(1901)延岡女学校と改称)し、女子教育にも力を注ぎました。昭和2年(1927)、政挙は亡くなりますが、今でも「延岡中興の父」として慕われています。

維新前後延岡藩士族屋敷図(部分)【明治大学博物館所蔵】

お問い合わせ

延岡市教育委員会 文化課 (宮崎県延岡市南町2丁目1-18)
TEL:(0982)22-7047 FAX:(0982)34-6438
E-mail:bunka@city.nobeoka.miyazaki.jp

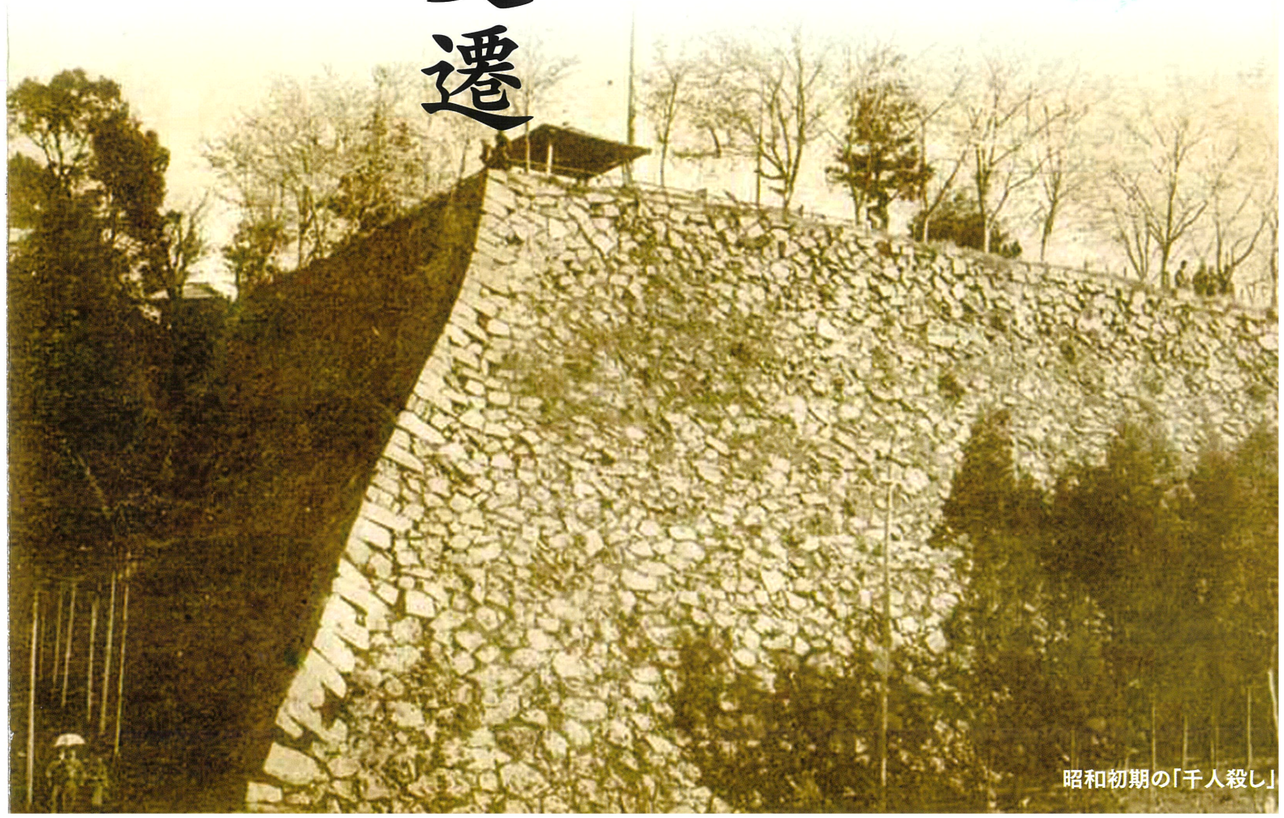
発行元 第35回国民文化祭、第20回全国障害者芸術・文化祭延岡市実行委員会

いざ神話の源流へ

続日本100名城
市指定史跡

延岡城

藩主の変遷


昭和初期の「千人殺し」

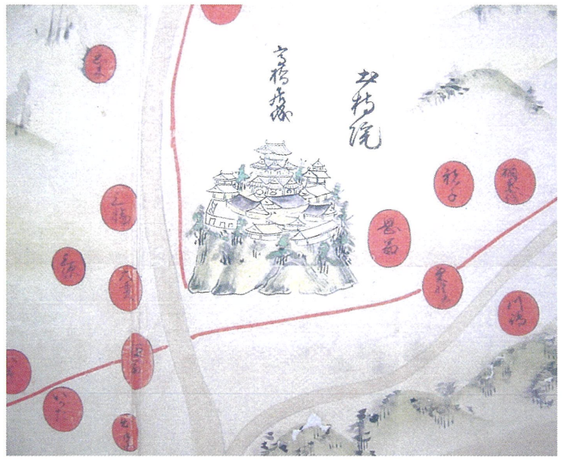
高橋時代　1587～1613年

〈城主〉高橋元種（築城者）　〈石高〉5万3千石（外様大名）
〈家紋〉抱き柊紋　「延岡の先賢」（城山ガイド・ボランティアの会編）より加工

天正15年(1587)九州へ侵攻した豊臣秀吉は、私戦を停止し、諸大名の国割を行います。これにより豊前国香春岳城主(福岡県田川郡香春町)であった高橋元種が入封、後年の検地によって5万3千石の石高が設定されました。

慶長5年(1600)の関ヶ原の戦では、元種は当初、石田光成の西軍に属しますが、徳川家康の誘いにのって東軍に寝返り、危機を脱します。関ヶ原の戦後、居城である松尾城(松山町)に戻り、慶長6年、松尾城の南方に築城を命じます。慶長8年の縣城(延岡城)完成に伴い拠点を移します。築城と同時に町割りにも着手し、城の東側に南町・中町・北町を整え、城下町の基礎を築きました。

しかし慶長18年(1613)、罪人隠匿の罪で改易となり、元種と嫡子左京は陸奥国棚倉藩(福島県東白川郡棚倉町)に預けられ、家臣たちも領内を離れ、新しい仕官の口を求めていきました。



日向高橋秋月氏所領図［慶長日向国絵図］(部分)【臼杵市教育委員会所蔵】

三浦時代　1692～1712年

〈城主〉三浦明敬　〈石高〉2万3千石（譜代大名）
〈家紋〉丸に三つ引両紋　勝山藩旗指物袖印図(岡山県立記録資料館蔵)より加工

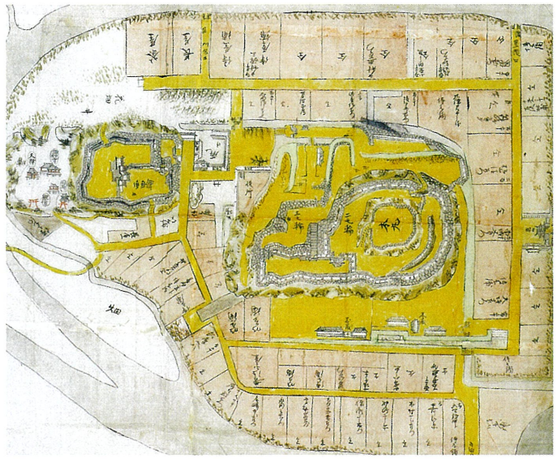
元禄5年(1692)、下野国壬生(栃木県下都賀郡壬生町)より三浦明敬が2万3千石で入封しました。

この時代に、縣藩から延岡藩へと名称が変わるとともに、これ以降、日本最南端に位置する、日向国で唯一の譜代藩としての延岡藩が成立しました。

明敬は、有馬時代から問題となっていた、竹田藩(大分県竹田市)との梓山をめぐる藩の境界論争を幕府評定所裁決により元禄13年(1700)に解決しました。
この時に決定した境界は、現在の宮崎県・大分県の県境となっており、今日の行政区画にも影響を与えています。

明敬が入封してから領内で風水害や地震などの自然災害が相次ぎ、農村(領民)の疲弊や藩財政の窮乏、家臣団の家計の困窮などへの対応に苦慮しつづけました。

正徳2年(1712)、わずか21年の藩政で三河国刈谷(愛知県刈谷市)に転封となりました。



日向国延岡城下絵図(部分)【岡山県立記録資料館所蔵】

有馬時代　1614～1691年

〈城主〉有馬直純(1614～1641) 有馬康純(1641～1679) 有馬清純(1679～1691)　〈石高〉5万3千石→5万石(外様大名)
〈家紋〉五瓜に剣唐花紋　延岡城二ノ丸出土鬼瓦　拓本

慶長19年(1614)、肥前国日野江(長崎県南島原市北有馬町)より有馬直純が5万3千石で入封しました。

この時代に城下町が拡張され、五ヶ瀬川の北岸に元町・紺屋町・博労町が、大瀬川北岸に柳沢町が整備され、城下に七町が完成し、現在の市街地の原形が出来上がりました。承応元年(1652)から明暦元年(1655)にかけての大規模な城郭改修により、天守閣代用の三階櫓・二階櫓・二階門などの整備や修復が行われました。しかしながら、天和2年(1682)〔天和3年とする資料も存在する〕、城下武家屋敷からの火災により三階櫓や櫓左右の塀などが焼失し、以後、三階櫓が再建をされることはありませんでした。

また、「延岡」の初見資料となる県指定文化財の「梵鐘城山の鐘」は、康純が今山八幡宮(山下町)に寄進したもので銘文に「日州延岡城主」と刻まれています。

元禄3年(1690)、山陰・坪谷村(宮崎県日向市東郷町)領民の大規模な逃散事件が起こり、その責を問われた清純は翌年、越後国糸魚川(新潟県糸魚川市)に転封となりました。

有馬家中城下屋敷付絵図(部分)【明治大学博物館所蔵】

牧野時代　1712～1747年

〈城主〉牧野成央(1712～1719) 牧野貞通(1719～1747)　〈石高〉8万石（譜代大名）
〈家紋〉丸に三つ柏紋　延岡城本丸階段出土鬼瓦　拓本

正徳2年(1712)、三河国吉田(愛知県豊橋市)より牧野成央が8万石で入封しました。藩領域は日向国のみならず、豊後国大分郡・国東郡・速見郡(大分県)にも広がり、次の内藤時代にも引き継がれました。

この時代には、幕府の新田開発の奨励や藩財政の窮乏などの理由から、岩熊井堰・出北用水の開鑿事業が行われ、年貢徴収のための基盤整備、年貢率の改定などの徴収強化策も推し進められました。しかしながら藩の財政は厳しい状況が続き、牧野家と繋がりの深い商家の三井家に大きく依存していました。また、藩政面も2度にわたる藩政騒動が起こるなど、大きく動揺しました。

寛保2年(1742)、貞通の京都所司代に就任に伴い、宮崎郡・児湯郡の所領が河内国(大阪府)・丹波国(京都府)・近江国(滋賀県)・美濃国(岐阜県)に替えられて、延享4年(1747)には常陸国笠間(茨城県笠間市)へ転封となりました。

延岡城下屋敷割下図(部分)【笠間稲荷神社所蔵】